

## 箕浦格良教授還暦祝賀論文集発刊に憶う

武 藤 守 一

箕浦格良教授は今年をもって還暦を迎えられ、また、これを機会に健康などの事情もあって来年三月退職し、郷里岐阜の大学に転職されることになった。したがって、この還暦祝賀論文集は同時に惜別記念論文集ともなったわけであり、喜びと悲しみとの二重の意味をもつことになった。

さて、箕浦教授を経済学部と同僚として迎えたのは、昭和二十四年のことである。それ以来すでに二十年、その間には箕浦教授について思い出すことはあまりにも多い。教授は研究者として必ずしも順調な道をたどられたわけではなかった。すなわち、教授が立命館大学経済学科を卒業されたのは昭和十六年のことであるから、三十歳を越えての晩学に属する。しかも、その秋には太平洋戦争が勃発しており、その翌年九月には福岡高等商業学校（現在の福岡大学）の講師として赴任し、いよいよ学究生活に入られたわけであるが、すでに戦局は悪化の一途をたどり、翌十八年秋には学徒動員となり、教育・研究条件は急速に悪化していたのである。

敗戦直後の混乱期は郷里に帰っていられたことなどもあり、母校立命館大学専門部教授として迎えられたのは昭和二十四年であった。しかし、当時教授が担当したのは財政学ではなく、簿記・会計学・原価計算などという経営学関係の諸科目であった。三十年に大学教授になられたころから、本来の専攻科目である財政学を担当され

ることになった。研究者として必ずしも順調な道でなかったとはこの意味である。

しかし、教授の財政学に対する学問的熱意の並々ならなかったことは、その頃から矢つぎ早に発表された多くの著書論文に示されている。最近は、「立命館経済学」にほとんど毎号欠かすことなく、スミスおよびリカードの財政論に関する論文が掲載されている。教授の学問的関心がイギリス正統学派の財政論の批判に集中していることが察せられる。それらの諸論文の評価については専門家にお任せするとして、その学問的意欲の強さには、われわれも感服せざるをえない。教授のそのようなエネルギーはどこから出て来るのであろうか。

教授は一見風采をかまわない野人であった。教授会での発言は思い出すのに難しいほどひかえめであって、集団の中で自己を主張されることはほとんどなかった。それは反面において、教授がその財政理論の上に立って最近の財政事情または財政政策について鋭い批判をされるのを聞く機会が少なく、それが残念でもあった。しかし、教授の研究室へ出入する学生は多く、談笑の声がよく聞えた。それは教授が剣道部の部長であったからであり、剣道と意合道の達人として聞えていた。したがって、その健康を疑うものはなかった。

しかるに、教授は昨年ごろから健康を害し、ついに半年間の療養期間をとるに至って誰もが驚かされた。それに前から郷里の大学への希望もあり、ここに還暦とともに来年三月で退職の予定となったのである。

多年の同僚が去られることは淋しいことであるが、特にわたくしにとっては戦前の立命館大学を知っている者がいよいよ残り少なくなることは一層の淋しさを覚える。しかし、今はただ教授のこれからの御健康を祈り、さらに続くであろう学問的熱意に御期待するのみである。謹んでこの記念論文集を贈呈する次第である。